

子育てアドバイザー（ラジオパーソナリティ）金子耕式氏が

保護者に贈る とっておきの話

子育てトーク No. 6



◆◆◆◆ 制限付きの自由を広げること ◆◆◆◆

今の時代、子どもたちの個性を大事にして自由にのびのびと育てたいと考える親たちが多いようですが、子どもたちを制限なしで自由にさせるなら、それはとても無責任なことです。

生まれたばかりの赤ちゃんには、100パーセントの自由を与えることなどできません。もしそんなことをしたら、それは育児放棄でしょう。赤ちゃんは完全に親の守りの中にいなければなりません。言い方を変えれば、赤ちゃんは親の手の届く範囲の中に置かなければならないのです。

でも、しばらくしたら少しずつ自由にできる範囲を広げてやらなければなりません。まずは部屋の中で、ハイハイすることを許します。自分の足で歩き始めたら、家の中を探検することを許します。その段階でも、それはかなり制限付きの自由と言えます。一人で勝手に外に出て行くことは許されないし、危ないものに触れたり口に入れたりしないように常に監視され、まだ自由はかなり制限されています。

さて、2,3才になると、家の外を歩いたり走り回ったりします。それでもそれはごく限られた範囲内のことで、自宅の庭とか近所の公園でのことです。時々、近くのお店にお買い物に行くこともあります。その時はいつも親に手をつながれて、100%の自由とはほど遠いものです。

時が過ぎ、やがて幼稚園、小学校、中学校、高校へと進んでいくと、自由にできる範囲はその年齢や能力に応じて広げられていきます。そして思春期にもなると、子どもたちはもう全てのことを自分の思いどおりにやりたいと感じたりするものです。でも、実際に思春期の子どもたちを完全に自由にさせてしまったら、とんでもない事態を招くことになることでしょう。だから、酒を飲んだり勝手に外泊したりすることを許したりしてはいけないのです。

子どもたちが完全に自立できる段階になるまでは、自由にできる範囲を親が適切に定めてやるのがどうしても必要だと言えるのです。



◆◆◆◆ 努力を褒めること ◆◆◆◆

能力の高い子どもには、親からも周囲の他の大人たちからも大きな期待がかけられます。でも、その期待が励みになるどころかプレッシャーになってその子を押しつぶしてしまうことがよくあるのです。

生まれながらにして、特別にIQが高く、小さい頃からその頭の良さをほめられ続けて来たトーマスのケースをお話ししましょう。トーマス君は、エリートだけが入ることが許されるニューヨークの有名私立小学校で華々しいスタートを切りました。でも、学年が進むにつれて、次第にやる気を失い、成績も下降線をたどっていきました。5年生になった時、心配したご両親はついに精神科の医者を訪ねました。

ご両親から色々な話を聞いた末に医者が指摘したことは、トーマス君の褒められ方の問題でした。彼の頭の良さは、小さい頃から誰の目にも明らかで、ことあるごとにその頭の良さを褒められ続けてきました。でも、小学校に入ってから、それが負担になり始めたのです。周りにも優秀な生徒たちがいる中で、自分の頭の良さを認められ続けることは容易なことではなかったからです。やがて彼は、ミスをして自分のイメージを損ねるよりは、何事にも消極的な姿勢を示すようになりました。そのことに気付いた医者はご両親に言いました。「今からは、持って生まれたトーマス君の能力を褒めるのではなく、結果がどうであれ、一生懸命頑張った時に、その努力を褒めるようにしてください」と。アドバイスを受けたご両親はそれまでのトーマス君に対する姿勢を反省し、褒め方を改めるように努力しました。すると、トーマス君は見違えるほどやる気を取り戻し、成績もぐんぐん上昇して行ったそうです。



世の中では、頭がいいとか美人だとかイケメンだとか、そういう生まれながらの能力や特徴がもてはやされます。でも、健全な子育てを願う立場からすれば、それが重要なことではありません。それよりも、持って生まれたそれぞれの能力を子どもたちがどれだけ努力して伸ばそうとしているかに注目すべきなのです。

この紙面は、下府中小学校PTA家庭教育講座として、連載をいただいています。